

## 梶井基次郎「瀬山の話（仮題）」原稿について

棚田輝嘉

昨年本学で、梶井関係資料を入手した。現在、翻刻作業等を行っており、原稿の影印・翻刻に考察等を付したものを出版する予定で話が進んでいる。本稿ではそれに先立ち、資料の現状について簡単な報告をしておくことにしたい。入手資料は、

- 1 梶井基次郎原稿・淀野隆三により「瀬山の話」と仮に名づけられた、原稿用紙自筆草稿
- 2 梶井関連の作品集・論文集
- 3 やかん・桐箱入り 箱の上蓋裏に「梶井基次郎のやかん 北川冬彦旧蔵 鶴岡善久」と墨書されている

「3」については、『新潮日本文学アルバム27 梶井基次郎』（一九八五・七 新潮社）の一〇七頁の上段に「北川冬

彦がもらった愛用のやかん」として写真が掲載されているが、それと同じものと思われる。

「2」については、原稿の旧蔵者が独自に集めたものと思われる。作品・研究書等を収集したもので、約百二十点。特に作品については、生前唯一の単行本である武蔵野書院『檸檬』（昭6・5）、戦前の全集である六峰書房『梶井基次郎全集（上）（下）』（昭9・3／6）、作品社『梶井基次郎小説全集（上）（下）』（昭11・1／4）なども含まれている。そうして、もつとも重要なものが「1」である。一九九九年の新版全集以外のすべての全集の編集に携わり、また、梶井没後、梶井紹介に中心的な役割を果たしてきた淀野隆三によって、檸檬の成立に関わる重要な原稿として「瀬山の話」と仮にタイトルが付され（以下、「瀬山の話（仮題）」

と記す)、これまで出版されたすべての全集に翻刻本文が所収されているものである。

その淀野による梶井全集の決定版とも言うべき昭和三四年の筑摩書房版『梶井基次郎全集』(以下、旧版全集と呼ぶ)では、この原稿の翻刻本文が第一巻(二月発行)に所収され、巻末「編者註」には次のように記されている。(以下Aとする)

瀬山の話(仮題) \*原稿は東京神田宮田製の原稿用紙で六十五枚(番号を打つて七十枚綴じたうちの)。

\*ほかに下書きが七枚残っている。 \*一枚目に「銀の鈴」と書いて消してある。 \*本全集第二巻日記第二帖第三帖に一部の草稿がある。

これに続けて、全集頁を示しながら異同等が八箇所注記され、最後に

四一四頁終行 この続くべき手紙は書かれてゐない。とある。

また、旧版全集の後、同じく筑摩書房から一九九九年に別巻を含む4巻本の『梶井基次郎全集』(以下、新版全集と呼ぶ)が出版されている。この新版全集(「編集ノート」)「解題」の後に「鈴木貞美」と記名があるので、鈴木を中心とする筑摩書房編集部による編集と判断される)の第二巻(一二月発行)にも、「瀬山の話(仮題)」本文が所収

されている。ただ、巻末の「校註」には、

\*この原稿は参観することができなかったため、旧版全集第一巻「編者註」(五〇二頁)を写しておく。

として、先に引いた「A」の注記を掲載しているため、新版全集編集時には、この原稿の所在は不明であったようである。

原稿の現状は次の通りである。

まず、原稿用紙以外に、二枚、別資料がある。一枚は、茶封筒の表だけを切り取ったものと思われる紙片で、次のような記事が書かれている。(〈〉内は棚田注)

瀬山の話 第一稿 〈朱筆〉

大正一三年(一九二四)

神田宮田製 20×20 〈以上、ペン書き、ブルーブック?〉

習作 16 〈ペン書き、ブルー、□で囲んである〉

第一枚目のみ出品 〈鉛筆〉

と十四枚と 〈右の「第一枚目」と「のみ」

の間に挿入記号で挿入ペン書き、ブルー〉

「習作16」という記述から判断するに、旧版全集編集の際

に使用された封筒だと思われる。

もう一枚は、「集英社『SS全集』原稿用紙」と記された20×20の緑罫の原稿用紙である。罫線のある表は白紙だが、裏に次のような記述がある。(以下Bとする)

瀬山の話 七九枚(内半ピラ1 白紙(番号ノミ)5  
初稿7枚)

先に引いたAには、「\*原稿は東京神田宮田製の原稿用紙で六十五枚(番号を打つて七十枚綴じたうちの)」。\*ほかに下書きが七枚残っている。」とあり、合計七十七枚。Bによれば七十九枚。そうして、「現物」は七十九枚、つまりBに一致する。うち一枚は、原稿用紙を半分に切断した半ぴらなので、Aでは、あるいはそれを除いたのかとも思うが、それでも一枚分計算が合わない。

また、Aに従えば、七十枚の原稿用紙が綴じられており、うち五枚は用紙のみ、さらに別に下書き七枚があったと理解できるが、現物には、綴じ紐等は残されていない。ただ、すべての原稿用紙に、原稿を綴じたと思われる穴が、それぞれ二箇所ずつある。また、これらの中には、3箇所乃至4箇所穴があいているものもある。「七十九枚」の原稿用紙が、どのような形で綴じられていたのか/いなかったのか、様々な可能性があり、軽々に判断を下すことは出来ない。

また、Aの「下書き七枚」、Bの「初稿七枚」は、同じものをさすと思われるが、その扱いにも疑問が多々ある。原稿及び旧版全集の翻刻本文から判断する限り、この「下書き七枚」が指すものを抽出することは可能だが、それらを「下書き」または「初稿」として区別してしまうのは問題があると、現時点では言わざるを得ない。これは以下に示す②の問題とも関わるので、いづれきちんとした形で判断を示したいと考えている。

最後に、この他に、全集本文と原稿とを対照して現時点で言えることを列記しておく。

① これまでの翻刻本文で示されている本文は、元原稿本文のおよそ七割程度であるということ。梶井による削除記号の付されていない本文で、「瀬山の話(仮題)」に採用されていない本文が大量にある。先に旧版全集では異同が八箇所示されていると述べたが、この程度の注記ではほとんど意味をなさない。逆に言えば、なぜわざわざ八箇所だけ異同を示したのが、問題になる。

② 現行の「瀬山の話(仮題)」本文は、淀野による(恣意的)な読解がなされた結果(作られた)本文となっている。もちろん、これは淀野の(善意)によるものであろうと思われる。つまり、読者に一定の(作

品」として読んでもらうために、〈编者〉としてなすべき作業と判断して、草稿の編集が行われているのである。ただ、この「瀬山の話（仮題）」という原稿のあり方を見直す過程で、七十九枚の原稿を一括して一つの作品と見なすべきか否かという、根本的な問題も含めて、様々な問題が提起されそうである。従って「瀬山の話（仮題）」という〈作品〉の存在自体もまた、揺らいでくる可能性がある。

こうしたことを含め、現在調査・研究を進めており、いずれ、詳しい報告が出来るものと思う。

（たなだ　てるよし・実践女子大学教授）